暮れ方の森にて

高井有一

暮れ方の森にて

著者　髙井有一

昭和7年東京に生まれる。早稲田大学英文科卒業。共同通信文化部勤務。昭和41年「北の河」で第54回芥川賞を受賞。以後一貫して「戦争」という大きな黒い手の傷みを書き続けている。

印刷　1976. 9. 10　　発行 1976. 9. 20

発行者　村山三郎

発行所　株式会社ロングセラーズ

〒160 東京都新宿区高田馬場3—23—1 淀橋食糧ビル

振替東京2＝145737／TEL(03)367—6128

印刷所　太陽印刷工業株式会社

製本所　凸版製本株式会社

定価はカバーと帯に表示してあります。

© 1976, Yuichi Takai, Printed in Japan.

万一落丁・乱丁の場合は，御面倒ですが小社まで御送付下さい。送料は小社負担にてお取替えいたします。

暮れ方の森にて

新しい家……5
影……21
山のかたち……39
老いの怖れ……57
焔の色……74
女弟子……90

不在の日々……107
春蟬の季節……124
秘密事……141
夕立のあと……159
眩しい道……176
形見の木……193

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

新しい家

今は住居表示の変更によって消えてしまったが、東京の西郊、旧北多摩郡と境を接するあたりに、かつて碌安寺町があった。関東大震災以後、西へ向って流れ出した東京の中産階級の人たちが、多く集り、家を構へた所である。昭和十三年の秋から十九年春までを、私はこの町に過した。ほぼ小学校在学期間に見合ふ時期である。

町名の由来となった碌安寺は、今は無い。私たちが住んだ時代にも、とうに無かった。江戸中期までは、辺鄙な土地には稀な広大な伽藍がそびえ、参詣の客で門前町は殷賑を極めたが、一夜の暴風雨のために堂塔は崩れ去って、再建を志す者もないまま

に、廃墟と化したと、文献は伝へてゐる。現在は、かつて塔があったといふ高みに立つ刻んだ文字すらさだかでない古い石碑によって、その趾を知るばかりである。

石碑の立つ高みの下には池があった。碌安寺池である。昭和三十年ごろ、この一帯にまで開発の手が延び、すっかり様子が変った。池の周囲には柳を植えた遊歩道が作られ、所どころに清涼飲料の広告を入れたベンチが置かれた。東西に長い池の西の外れ、もと広い庭を控へた農家があったと思はれるあたりは、木がすべて伐り払はれてぶらんこや滑り台を設けた型通りの小遊園地となってゐる。

しかし、私の住んでゐた当時は、子供たちにとって、西の外れの農家にまで行き着くのは容易ではなかった。池の北側に小径が通じてはゐるのだが、そこは湿地であって、所によっては肩までもある草が生ひ茂り、よほど気を付けて行かないと、深い所へ踏み込んで、太腿まで沈んでしまふ。湿地に棲息する生き物も多く、ぬかるみに足を取られて転ぶ眼の前は、大きな蟇が蹲まって、凝と此方をみつめてゐたりした。かうした危かしさが子供たちを昂奮させ、碌安寺池は面白い遊び場であった。

西の外れの農家の庭で、餌をつついてゐる鶏を脅かして、百姓の老人に呶鳴られた事がある。

「お前ら、今度悪さしてみろ、つかまへて池へ放り込んぢまふぞ。放り込まれたらお前ら、上れやしねえから」

顔を真赤にする老人に、私たちは、

「へん、爺いなんかにつかまるかい」

と悪態をついて、一散に逃げた。泥深く、藻が密生した池に投げ込まれでもしたら確かに上っては来られなかったであらう。

そんな淋しい池にも、貸ボート屋が一軒だけあった。位置は、ちゃうど農家と向き合ふ東の端で、小さな棧橋に舫ってあるボートは、十数隻に過ぎなかっただらう。櫂に藻がからまって危険なため、「子供さんには漕がさないで下さい」と貼り紙がしてあったが、私たちは、人の好いボート屋のお内儀さんにせがんで、よく子供だけ三、四人で漕ぎ出したものであった。

「立札の向うへ行っちゃいけないよ」

といつもお内儀さんは言ふ。池の三分の一あたりまで行ったところに、「この辺深い注意」の立札が、腐りかけてかしいで立ってゐる。更に半分を少し越したところまで行くと、水面に葭が群生し、「この先危険」の立札が、これもかしいで立ってゐる。その方へ近付くなと言ふのであった。

「行かないよ」

と子供たちは口を揃へる。しかし、本当は彼等の楽しみが、葭の繁みの向うにあるのはむろん、お内儀さんも知ってゐただらう。

繁みに近付くと、一人が舳先に寝そべって、水先案内を勤める。これは仲間うちの最もちびの役目である。

「取り舵一ぱい、今度は面舵」

などと、彼は張り切って声をかける。繁みと岸との間に、ボートの通れる深さのある所は、せいぜい幅二米しか無い。舷や、時には舟底まで、葭の茎がこすって、鈍い

音を立てる。漕ぎ手は、藻にからまれないやうに、そっと浅く水をかき、あとの者は下を向いて息をこらしてゐる。いっぱし、難航路を行く船員のつもりなのである。

僅か三十米くらゐをさうやって過ぎると、急に視界が展ける。池が南の方に切れ込んで入江を作ってゐるのである。水の色が変ってゐた。ほかのところでは、水は黒みがかって澄み、舷から乗り出せば、底の藻のゆらめきまで見えるのに、そこでは胡粉を混ぜたやうな不透明な蒼さとなり、掌で触れてみると、冷たさがぐんと増したやうに感じられる。

入江の周囲は、かなり急な斜面で、古い大きな木があたりを暗くするほどに茂ってゐた。水面とほぼ水平に太い幹を延ばし、梢を水が浸してゐるのも数本はある。木の影は、底の知れぬ水の奥に深ぶかと沈み込んで、身をひそめる巨大な動物がゐるやうな錯覚を起させる。周囲はしんとして、舟底に当る水の音ばかりが高く聞え、わざと無意味に甲高い声を出してみても、たちまち吸はれるやうに消えてしまふ。

入江の一ばん奥は、小さな祠があり、これも小さなお地蔵様が二体祭られてあっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

た。祠は古びて壊れかけてゐるのに、お地蔵様の涎掛けは、いつも真新しく赤かったやうな気がする。深い木立の間を、町への径が通じてゐて、願をかけに来る人でもあったのだらうか。不機嫌に黙りこくったやうな風景のなかに、涎掛けの赤だけが生なましく、さういふもののある事が、子供たちを入江へ誘ふ一つの力になってゐたかも知れない。

多分、二年生の時の夏休みだったと思ふ。近くの中学生が一度だけ仲間に加はった。弟からでも、池の遊びの面白さを聞いたのだらう。漕ぎ手を引受けた彼は、ボートが入江の中央に進むと、不意に上着とズボンを脱ぎ棄て、

「飛び込むぞ」

と叫んだ。危い、と止める暇もなかった。泳ぎに自信があり、また年下の連中に威勢を示したくもあったのだらう。飛沫をあげて飛び込んだ彼は、直ぐに、ボートから手を延せば届くほどの位置に浮き上って、口を開いて笑い、

「気持いいぞ」

と言ふなり、また潜った。しかし今度はなかなか浮かんで来なかった。そしてやうやく浮いたのは、ずっと離れて、鬱蒼と葉を繁らせた木の梢が、水面すれすれに突出てゐるあたりであった。彼はもがきながら三たび沈み、次に顔を出すと胸苦しいやうな叫びを立てて、木の枝にしがみついた。

「溺れてやがら」

誰かが他人事のやうに呟いた。どうしたらいいか、咄嗟に判らなかったのであらう。私ともう一人が慌てて櫂を取り、ボートを彼の方へ漕ぎ寄せた。櫂が徒らに水を叩いて、ボートはさっぱり進まなかったやうな気がする。彼は舷に飛び付いて、一刻も早く這い上らうと焦り、ボートは危ふく転覆しさうにさへなった。

「言ふなよ、こんな事、誰にも言ふなよ」

と周りを見廻して彼は言った。寒気立って、膝頭が震へてゐた。

「深いとこで、水が流れてるんだな。すごく冷くて、おっかねえぞ」

その恰好は、はなはだ滑稽だったが、誰も笑はず、一様に押し黙ってゐた。あのお

地蔵様の祠の下の水の奥深く、洞窟が口を開いてゐて、水の流れとともに、池の生き物をすべて呑み込んでゐるのではないか、と私は思った。いつか読んだ物語に、そんな情景が確かにあったのである。口留めされたためではなく、私は、その事を両親に告げなかった。若し告げたら、自分にも同じ事が起るのではないかと、私は、謂はれなく怖れてゐた。

池が公園となった今では、昔の入江の風景を想像出来る人はゐないだらう。古木は伐り倒されて道がつき、お地蔵様の祠のあった付近には、花壇が作られ、地元のライオンズ・クラブの寄贈による花が、月毎に植え替へられて、家族連れのささやかな行楽の場に、彩りを添へてゐる。

私たちの一家が、この池に近い町に移って来る前、父は、家を捜すのにかなり苦労をしたらしい。父は洋画家であり、何よりも整ったアトリエが必要だったが、条件に合ふ売り家は当然ながら多くはなく、さうかと言って、新築するだけの経済的な余裕はなかったのであらう。

冬の、曇った冷え込みの厳しい日、家の検分について行った記憶がある。詳しい場所は忘れたが、中央線を東中野駅で降りて、北の方へ歩いて行ったのは確かである。恐らく、上落合のどこかであらう。途中、赤い瓦の尖った屋根に、白塗りの露台を持つ豪邸が木立に包まれてあり、こんな家に住めればいいな、と考へたのも淡い記憶である。

しかし、私たちが訪ねた家は、荒れ果てたものであった。アトリエは別棟になってゐたが、北側の窓硝子が割れて、板を打ち付けた隙間から雨が床に汚斑を作り、壁には、走る虎にまたがった裸女の絵が、装飾とも落書ともつかず描かれてあった。その壁にも、雨の汚斑は浮き出してゐる。

「若い奴が使ってゐたんだといふが」

と父は、不快さうに壁の絵を眺めてゐた。

「薄汚いものを描きやがる」

「伊達さんもひどいぢゃない」

母は父の友人の名を挙げた。その人が、家を紹介したのだったらう。
「まあ、いいさ」
父は私を顧みて言った。私も頼りなささうな顔をしてゐたかも知れない。
「ここは止めだ。帰らう。新宿で美味しい物を食べて帰らう」
東中野の駅で、電車はなかなか来なかった。爪先から這い上る寒さに私は足踏みし、父と母は、女中の恒やの話をしてゐた。私が物心ついた時から家にゐる恒やが、近く嫁に行くのは、私もうすうす知ってゐた。
「心配してやらなくてはいかんな」
と父が言ってゐる。
「親父さんは、相変らずよくないんだらう」
「ええ、やっぱり、お金を少したっぷりあげるのが、一番ぢゃないかしらね」
私たちのゐるフォームから遠い線路を、浅川行の急行電車が走り抜けて行った。車内にはもう灯が点き、吊皮につかまる人の姿が黒く見える。

「急行は早くていいな」

私は、両親の会話に割り込みたくて、甘えて言った。

「新しい家は、急行の止るところにしない？」

「ああ、ああ」

父は煩ささうに言った。

「子供は余計な心配をするんぢゃない」

気に入らぬ家を見せられた不快が、まだ尾を曳いてゐたのだったらう。

碌安寺町への移転が決ったのは、それから半年後である。その年の春、恒やは、私にまで叮嚀に挨拶をし、大きな風呂敷包を二つ抱へて、家を出て行った。別れ際に、彼女は、台所口まで送った私に、

「これ、あげませうね」

と紙に包んだものを呉れた。恒やの手は暖かくなっても、霜焼で膨れてゐるやうに見える。母に言ってはいけないやうな気がして、あとでそっと包みを開けてみると、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c